

2077 年

10 月 28 日

徒歩はこれで五日目だが、まだ眠れない。

表じゃまるで何もなかったかのようだ。空の様子がおかしいだけだ。

トカーヴィル近くで横転した州兵のトラックまで戻るべきか？マメが治ってから考えるか。

USGS チームはこの洞窟で何かを調査していたみたいだ。爆弾が降ってきて慌てて撤収したせいか、装備が置き去りにされてる。家族がまだ生きてると思ったんだろう。

10 月 29 日

シャル、歩きながら幾度となくこの言葉を口にしたよ。でもここに書けば、君に伝えられたという実感が強まるかもしれない。

君の言ったとおりだった。

スパニッシュ・フォークの北にいた。町を迂回するためにプロヴォ・ベイ沿いに 77 号線に入った。一時間もすれば家に着けたはずだった。ところがエンジンが死んで、トラックが急に止まってしまった。別の車線にいたクライスラスも停止した。

すぐに原因を察したよ。

1 分もしないうちに最初の核がソルトレイクシティに着弾した。運良く、丁度南を向いていた。背後でまばゆい光がして、全世界が燃え上がっているのかと思った。クライスラスにのっていた老夫婦が、目が見えないと言って騒ぎ始めた。

君が死ぬところは見なかったよ、シャル。目を守ったんだ。その後七分間で光が 12 発。毎回、閃光の 18 秒後に地面が揺れた。

三九分間爆弾がなかったので、町の方に目を向けた。君とアレックスが死んだ場所には巨大な火の玉が見えた。疑う余地もなかった。

どうすればいいかわからなかった。荷物とライフルを手を取った。

老夫婦の面倒を見た。車を背に座らせて、お互いに抱き合って慰め合えるようにした。助けを呼んでくるから心配するなと言いついて聞かせて、弾丸 1 発を二人の頭に通した。一瞬だった。

ザイオンに向け、徒歩で 5 日間。

君に言われたよな。野原をかけずり回るのもいい加減にしろ。家族と一緒にいるべきだと。

そうともその通り。君に言われたとおりだった。君と息子を抱きしめてやれなかった。一緒に死んでやれなかった。二度と手を触れてやることもできない。

銃で頭を吹き飛ばそう。当然の報いだ。でもできない。もうじき、できるだろうか。

10月31日

表は真っ黒い雨が降っている。ガイガーカウンターの数値が一気に上昇。雨にやられて死んでしまいたい、洞窟の奥の水を瓶に入れて備えている。

11月2日

すべてが死に絶えてしまったかのようだ。でも見に行けない。洞窟の入り口から数メートルの位置でガイガーカウンターが致死レベルに入ってしまう。

簡単な計算だ水が亡くなるまでに放射能が弱まらなければ、死ぬだけだ。

1月1日

新年おめでとう。

洞窟にこもってもう2ヶ月近くになる。表はまだ致死レベルのまま。変だな、軍では2週間から4週間で放射能が消えるって言ってたのに。

水の残りは一月分。洞窟の壁の結露をシャツで拭き取って、しばって瓶に貯めるようにしている。カロリーを水分に換えているわけだ。幸い食料は足りている、USGSに感謝。

君ら二人に会える望みがわずかでもあれば、表に走り出るところだ。

1月10日

表じゃここ二日ほど、暴風が吹き続けているみたいだ。放射能が500も下がっている。何があったんだ？

1月15日

外を覗いてみた。雪が積もっている。緑色に光っていた。

1月28日

放射能が弱まってきて、短時間なら表に出ても何とかなっている。

それ以上に大事なのは、放射能対策の薬を使えば洞窟内の水流が飲めるようになったって事だ。

1月30日

もう何も生き残っちゃいないようだ

2083年

5月5日

再生は続く。

ハニーマスキート、バナナ・ユッカに加え、ウチワサボテンも生き残っていた。節や形が少々妙だが問題なく食べられる。収穫の際は細心の注意を払い、5分の1以上は採らないようにしている。缶詰じゃない物を食べようとするたびによだれが止めどなく出てくる。

5月7日

「お昼寝君」と呼んでいる倒木の近くに、例の刺してくるハエの大群が。その群衆の中で時々小さな光。トンボ

くらいの大きさの何かが、空中でハエをビリッとやって、パクッと食べている模様。新種のような。

5月19日

ヒツジが居た！ビックホーンの家族だ！雄ヒツジと雌ヒツジと子羊が1匹ずつ！

やったぞ、こんちくしょう！

5月20日

ヒツジたちは違う感じだった。ごついというか。雌ヒツジも雄ヒツジと同じような、湾曲した角が生えていた。小さなトカゲなら何度か見たが、あれほどの大型の動物は初めてだ。

うまくいくだろうか。5年から10年かけて上手く繁殖させれば、新鮮な肉と皮と角が手に入る。

もうじき戻ろうと思っているよ、シャル。この冬を越えたら、だな。

2084年

6月14日

さっき戻ってきた。つかれた。道すがら、色々回収できた。結局荷車1台分を引きずって歩くことになった。明日書こう。眠い。

6月15日

4月10日に出発した。ソルトレイクシティまで徒歩で15日かかった。昔なら7日から8日で着いたはずだが、放射能の強い場所を迂回したり、途中で現地調達したりしたためだ。

何を期待したんだろうな。自分の家を見つけてがれきを掘り返して、何かを見つけられるつもりだった。君とチビ助の骨くらいはな。このザイオンにでも埋葬しようと。ソルトレイクシティはクレーターだらけだ。高層ビルの建っていた場所にはねじ曲がった鉄骨。煉瓦の山。

家は結局見つからなかった。道すらわからなかった。クレーターじゃない場所はきれいさっぱり焼き尽くされていた。

願わくは、苦しまずに一瞬の光で蒸発したのだと信じたい。自分の気を楽しむための欺瞞だが、真相は永遠にわかるまい。町のどこが最初にやられたのか

北東なら即死だっただろう。もっと遠くなら泣き叫びながら焼け死んだか、爆風で飛ばされたガラスや煉瓦や木の破片でミンチにされたか。目を背けるな腰抜けめ、耳を澄ませ、そっぽを向こうとするな、立ち向かえ。このラッキー野郎に勇気があれば、適当な場所で自分の脳天を吹き飛ばしていたはずだ。

だがそうはしなかった。たっぷり時間をかけて歩いて戻った。しかも買い物ついでだ。あちこちあさりやがって。

トラックは77号線上スパニッシュ・フォークの北にまだあった。クライスラスもあったが、あの老夫妻の骨は見当たらなかった。

ネフィーの外で足跡を見つけた。男 3 人でファウンテン・グreekに向かったようだ。たどってみようかとも思ったが、やめておいた。仲間に会えるなんて夢物語だ。どうせ人食い野郎か何かだろう。

6 月 20 日

二日かけて扉を作って電線をつなげた。押し売りはお断りだぞ、クソ野郎ども。ここを誰の家だと思ってやがる。

2095 年

9 月 20 日

総勢 28 名だ、成人男性 11 人、女性が 8 人、2 歳から 10 歳の子供が 9 人。状態の酷いライフルやピストルが少々、旧世界の服を着ているが、総じてみすばらしい。

9 月 22 日

昨夜は話し声が聞こえるくらい近づけた。スペイン語みたいだった。メキシコから来たのか？

「パラディソ」だか「パライソ」って言葉を何度も口にしていた。天国って意味か？定住するって事だよな。

無害そうに見えるが、油断はできない。

10 月 5 日

「マリア」と呼んでいる子は身ごもっているようだ。父親は「ホセ」だと思うが、彼女は「パブロ」ともしょっちゅう一緒にいる。

10 月 7 日

「ペドロ」が川で小用を足しに出てきた。首を左に向ければ此方の姿が見えただろう。近づきすぎだ。もっと間合いを取ってやらないと。

11 月 10 日

「ホセ」がビックホーンを追っていて脚を折ってしまった。野営地から遠すぎて声が届かない。放っておくべきだと自分に言い聞かせたが、見過ごせなかった。野営地から 300 メートル弱の所まで近づいて「ホセ」の叫び声に似せて怒鳴り、何人かが様子を見に来たので本物の「ホセ」の声がきこえるりょう線まで誘導した。

おそらく無意味だろう。複雑骨折、皮膚が破れてしまっていた。

11 月 11 日

「カンセン」ってやつだ。似ている言葉があまりに多い。そのうち通じるようになりそうだ。いずれにせよ、「ホセ」の脚がそいつを起こしてしまった。死は免れないだろう。自然は残酷だ。もちろん連中は神頼みを試している。

11 月 12 日

昨晚、連中の野営地の外の岩の上に抗生物質を 1 ビン置いておいた。奴らは当然、神様（「ディーオス」だったか）に感謝してた。世界を焼き尽くしたくせに、気の毒に思って岩の上に薬を残していくのか？どんな神様だよ。

11 月 15 日

「ホセ」は一生歩きにくいままだろうが、それ以外は問題ないはずだ。一月一善ってやつだ。

連中、冬を越せるんだろうか？

2096 年 I

2 月 11 日

クソッタレどもが、男連中を皆殺しにしやがった。女たちは生け捕りにしそうなところだったが、マリアとセレナが撃ち始めたうえに他にも何人かが銃に手をのばしたもので、射殺されちまった。子供何人かもろともだ。

警告してやれば、こんなことには。

2 月 12 日

エレナとカルメンと子供 5 人がまだ生きていて、オリに入れられている。

青い服のクソッタレどもは総勢 100 人以上いる。どれも背中に「2 2」の数字が見える。何なんだ、あれは？サブマシンガンやピストルをたっぷり持ってやがる。8 割方男ってどこか。全員が黒髪 of ヤツの指示に従っているようだが、覚信がもてるほど近づけない。かなり規律正しいようで、偵察隊に見張りが居る。本格的だな。

夜間に忍び込んで、女と子供を逃がしたとして、それからどうする？

でも放っておけない。何とかしないと。

2 月 13 日

夜間に偵察してきた。かなり強固な態勢で、接近経路のほとんどは見張られている。ただし小川は死角のようだ。こいつら病気なのか？咳き込んでる奴が多い。結核とか？

女と子供はまだオリの中だ。明朝、小川から潜入を試みる。

2 月 14 日

全員食われてた。

2 月 19 日

小川沿いの小道で待ち伏せ。男を 6 人殺した。1 キロ半先からせき込むのが丸聞こえだった。

連中の手りゅう弾で死体にブービーとラップを仕掛けた。サブマシンガン 6 個、10 ミリ弾 500 発、フラググレネードを 6 個回収。

2 月 20 日

小川沿いの小道で待ち伏せ。男 2 人が死体の確認時に死亡。もう 2 人をライフルで殺害。1 人はふくらはぎを撃

ち抜いて、仲間に証言できるように見逃した。はいずりながら、まるで肺を撃たれたかのようにせき込んでやがった。

2月23日

炭場の1キロ弱東で待ち伏せ。男8人殺害

2096年Ⅱ

2月29日

谷で待ち伏せ。男6人殺害。ももに10ミリ弾を食らった。幸いスチールジャケット弾で、大たい動脈も外れた。止血帯を使い、洞くつに戻る途中の岩に血痕を残さないように徹底した。入口通路沿いにトラップをありつけた。仕掛けしたが、発見されれば時間の問題だ。とはいえ、10日間で24人の殺害確認は老人にしちゃ悪くない。敵の戦闘員の3分の1仕留めたはずだ。

3月2日

あぶないあぶない、運が良かった。少人数の偵察隊、男3人だった。悲鳴で目が覚めた。先頭の1人が落とし穴に潰されて、乱射された弾が洞くつ内に跳弾してきて当たりそうになった。ほふく前進してサブマシンガンで全員殺した。危うくフラググレネードを使いそうになった。バカだよな。ピンに指をかけたところで、破片も跳弾するのを思い出した。

今すぐここを離れる。近くに他の偵察隊はいないが、この3人がもどらなければ谷を探索しにくる。持てるだけ食料を持って、南の洞窟に向かう。

2097年

1月13日

せき込み野郎どもがついに居なくなった。生き残っていた34人全員だ。死んだ連中を食って力を付けたうえで、南東に去っていった。

これが勝利か。10ヶ月間殺し続けた。寒さしか感じない。何もかも当然の報いだからな、クソッタレども。

=====

『警告：このキャニオンは復讐でうず巻いている』

このメッセージを読んでいるなら、悪いことは言わない、回れ右してこの谷から真っ直ぐに走り去った方が良い。

11ヶ月近くに渡り、我々一団は毎日のようにこの地に巢食う邪霊と戦ってきた。

昨年2月に118人の大人数でここにたどり着いた際、未開の一団に攻撃され止むを得ず応戦した。すると何者かが我々を片っ端から惨殺し始めたのだ。あらゆる手を尽くしてそいつを見つけ出して殺そうとした。当初は、銃器を撃って使ってきたり、様々なワナを仕掛けてくるので相手は人間かと思っていた。だが、我々が総力で当たってかなわない者が、ただの人であるはずがない。どんな人間よりも邪悪な恐るべき存在だ。

人数はわずか 34 人にまで減らされてしまった。私の前に 6 人の監督官が命を落としている。その何人かは Vault で感染してしまった肺病に屈したが、邪霊に殺された仲間の人数に比べれば微々たるものだ。

ついに監督官の役目が私にまわってきた。我々はただちにこの地を離れ、戻ることはないだろう。新鮮な水、豊富な獲物、そして雨風をしのげる場所を期待してこのうわべだけの楽園を訪れたなら、決してだまされるな。ここには死しかない。すぐにここを離れ、距離をとるまでは決して歩をゆるめるな。

=====

1 月 17 日

夢かと思ったが、本物の悲鳴だった。一瞬、奴らにしてやられたのかと思った。ザイオンを離れるふりをして、密かに偵察隊に戻らせて居場所を突き止められたか。だが悲鳴は女の声だった。

様子を探るために通路の角をゆっくりと回り込んだ。Vault 人が 1 人、ベアトラップが足首にがっしりと食い込んでた。サブマシンガンを構えたが、泣いている姿にためらってしまった。

姿を見せたと時の叫びようは相当なものだった。長い間、悪霊のようにたたってやってたからな。

名前はシルヴィー、奴らから逃げてきたそうだ。奴らのことを邪悪な連中、「悪魔の子供」と呼んでいる。話を聞いてみるとやはり連中はみんな感染しているようだ。住んでいた Vault の何かが原因とか。彼女自身は(まだ)発症せずにすんでいるそうだ。

まいったよ、彼女の傷の手当てをするはめになっちまった。

1 月 18 日

彼女から聞いた話は昨年中に「尋問」で聞き出した内容とつじつまが合っているが、本人の談では……とにかくあの一団で女、というのは過酷な立場だったようだ。そのため、彼らが立ち去った時、隙を見て姿をくらましたそうだ。

Vault の外での暮らしについては何も知らないに等しい。だが学びたいと言ってきた。

※Vault22 <http://kubinashi.zombie.jp/dicnvlog/dx.cgi?key=376>

2100 年

9 月 9 日

こんな恐ろしい思い、生まれて初めてだ。

カナダのあれは怖くはなかった。罪深く、おぞましいだけだった。

この世の終わりだって怖くはなかった。

君とアレックスが死んだとわかった時、何も恐れるべきものなど残っていなかった。ろくな理由がないのに生き続けてしまった。

Vault の奴らと戦っている時も恐怖は感じなかった。殺せるものなら殺してみろ、と挑発し続けている気分だった。奴らを殺す時、ここ数年で最も幸福に近い感情をおぼえた気がする。

シルヴィーは身ごもっている。恐ろしくてたまらない。

こっけいなじじいだよ。47 歳にして、また父親になるのか？こんな世界で？

彼女は楽しみでしょうがないみたいで、何の疑いも抱いていないようだ。この子が生まれるのは神の意志だと。決して悪いようにはならないと。

そうなんだよ、シャル。彼女は君とアレックスのことは知らない。話してないんだ。
話しそうになったこともあったけど、君との思い出を他人に話すべきではないと、思いとどまった。

むしろこうだ、前に愛した妻の期待にどれほど応えられなかったか。それを若妻に知られたくないと思う、じじいのエゴだよ。

医学書と消耗品目当てに徒歩でトカーヴィルに向かうつもりだ。すべきことをちゃんとやりたい。

シャル、本当にすまない。許してくれると願いたい。

2101 年

3 月 5 日

逆子だった。生きていたら息子のはずだった。名前は「マイケル」にした。

回転させようと手を尽くしたが、ダメだった。帝王切開に踏み切るのが遅すぎたのか。シルヴィーを眠らせなければならなかった。二度と目覚めなかった。

母子を谷の南側に埋葬した。

今回は最期まで一緒にいてやれた。幾分マシだろうか。

ようやく思い切れそうだよ。自分のクソだらけの脳ミソを、このいまいましい洞くつの中にぶちまけてやる。

2108 年

8 月 22 日

谷の入り口の北東 1 キロ弱にて、10 人分の足跡を発見、まさかハダシなのか？

8月23日

スコープ越しに見た。死体が歩き回ってる。ついにおかしくなったか。あるいは脳みその寿命か。

8月24日

幻覚じゃなかった。奴らは本物だ。実在してた。

こちらへ気づいた途端に襲いかかってきた、動物のように牙をむいて。見た目は死体みたいだが、腐臭はしない。

安らかに眠らせてやろう。自分にはできなかったことを、彼らに代わって。

9月3日

最後の一体を仕留めた。これで全部だ。

スポア・キャリアー<http://kubinashi.zombie.jp/dicnvlog/dx.cgi?key=538>

2113年

2月5日

ハッピー・バースデーじいさん、ハッピー・バースデーじいさん、ハッピー・バースデークソじいめ、ハッピー・バースデー、じいさん。

60歳の誕生日か。全てを手にした男に、何を贈れというんだ？

ウィスキーのボトルと、12ゲージのスラグ弾、口の天井をぶち抜いて！それだ！

どうすりゃいいんだ、十分に長生きしたことを自分に納得させるには？

すっかりヨボヨボになっちまった。あごひけも白い。数え切れないほどの夜明けと夕暮れを見てきた。巨大な夕暮れを目にして、永遠の夜に38年間も耐え続けてきた。まったく馬鹿げてる。

向こう側に何かあるなんて甘い考えはしていない。かまわんさ。このじいさんが生まれる前は、世の中そんなにひどくなかった。

シャルとアレックス。シルヴィーと、生まれきれなかったマイケル。

死ぬ前に脳裏をよぎる、先立ってしまった愛する者たち。

さらばだ、ザイオン。

2月6日

結局引き金が引けなかった。相変わらずの臆病野郎だ。来年はボトル2本飲んでみるか。

2123 年

4 月 25 日

総勢 24 人、男女半々だ。最年少が 8 歳くらい、最年長でも 13 か 14。体は汚れて服はボロボロ、かなりの距離を歩いてきたんだろう。まるで少年十字軍だ。

いつぞやのメキシコの連中とほぼ同じ地点で野営している。30 年前の話だが。

二晩かけて話し声を聞いてみたが、英語で、教養もある。チビたちが寝つくまで、1 人が物語を読んで聞かせている。

どうやら「学校」とかいう場所から逃げ出してきたようだが、場所はまだ特定できてない。チビすけをしかる時は、「やめないと校長につかまるぞ」と言い聞かせてる。

校長さんよお、顔を出さない方が身のためだぞ。吹き飛ばされたくなければな。

この年でも射撃には自身がある。

2124 年

1 月 2 日

彼らにメッセージや贈り物を残したりしている。

本は気に入ってくれたようだ。最初は物語だったが、武器の解説書や医学書など、実用的なものも置くようにしつつある。

メッセージのほうは、まあけっこう恥ずかしいものだ。人々が贈り合っていたカードのように、きれいごとを並べ立ててしまう。彼らには本を読んで、あれこれ学んで、新しい家をできる限り活かすように言っている。これまでの彼らの人生の数多くの悲しみと、人が人にもたらしたあらゆる悲しみの代償として、彼らにザイオンを贈りたい、と。

優しさと敬意をもって互いに接すること。お互いを傷つけるなかれ、でも万が一誰かがやってきて君らを傷つけようとするなら、正義の怒りで反撃すべし、と。そんなのばかりだ。

メッセージの一つ一つに「君らを見守る父」と署名している。理由は・・・特にない。

1 月 18 日

書き忘れてたが、どうも先が長くなさそうだ。

頭はしっかりしているが、問題は肺だ。

ガンかもしれない。何ヶ月も前からせきが酷くなってきて、ついに血が混じるようになった。すぐに息切れするもんで、若い友人達のそばに行くのが次第に大変になりつつある。

持っていたものを大半あげてしまった。残りはもう少し年をとった頃に洞くつで見つけてくれるだろう。

でも本音を言えば、見つけてほしくはない。「見守る父」が病床のじじいだなんて、幻滅もいいところだ。

しお時だろう。これ以上、誕生日をむかえたくはない。

1月23日

この気温だと、レッドゲート横の高地で長くはもつまい。何とかたどり着けるだけの体力が残っているはずだ。適当に横になって、空でも眺めることにしよう。それがいい。

彼らがうまくやってくれるといいが。内外から害にさらされずにすみすように。最後の何通かのメッセージで、伝えられることはできる限り伝えた。一人一人についていいところ、かけがえのないその子らしさをほめた。「見守る父」は彼らの優しい心に満足している、これからは自分たちでやっていかなければならない。二度と言葉をかけることはなくなるが、彼らを見守り続け、大切に思い続けているよ、と。

嘘だよな。大嘘だ。

君にも嘘をついた。アレックスにも。シルヴィーにも。いつまでも一緒にいると言った。だが、たとえ今から過去に戻って取り消せたとしても、取り消したりしてたまるものか。

何のために今まで生きてきたのか？力及ばないことが、あまりにも多すぎた。

だが君の顔を忘れたことはない。チビすけのもだ。(すまん、許せ)シルヴィーのもだ。時間が経ては忘れる、なんて話を聞いていたが、私は違った。

もしかすると、これまで生きてきた唯一の理由は、この脳裏の思い出たちを少しでも長く生きながらえさせることだったのかもな。それが、この老いぼれが君たちに与えられる唯一の命だった。思い出たちは毎日を精一杯に生きた。

自分で決めたことじゃない。何度も死のうと決意した。だが死ねなかった。体が独自の意志で突き進んだ。

あの子らも、同様の力を必要とするだろう。種としても存続するには必要になる。がむしゃらに突き進む、そんな力が。

彼らに幸あらんことを。最後の最後に、純真なる彼らの姿を目にできたこと、それはこの上ない喜びだった。

さらばだ、ザイオン

ランダル・ディーン・クラーク

2053年2月5日—2124年1月 <http://kubinashi.zombie.jp/dicnvlog/dx.cgi?key=1611>